

桜台 Sakuradai Village ビレジ自治会だより

Residents' Association News 令和2年7月号

【発行・編集】桜台ビレジ自治会 担当：2B-103 三輪 090-7018-0601

住民リレーボイス⑥

4B棟 橋本忠佳さん

「誰もが戦力！ みんなで取り組む 桜台ビレジ防災対策を」

この度、令和2年度「桜台ビレジ自治会」の副会長と「みたけ台小地域防災拠点活動」の防災担当者の一員になりました橋本です。三輪会長より「桜台ビレジ自治会だより」の依頼を受け、併せてビレジ副会長とみたけ台小学校地域防災担当者となった機会に、今回は皆さんと一緒に桜台ビレジに限定した「地域防災」考えていきたいと思ひます。

●2044年までに直下型地震が発生する割合は、70%と高率

さて、新型コロナウイルスによる「緊急事態宣言」から6月19日に移動自粛が全面解除されるまでの間、私たちの生活はその対応に翻弄されてきました。全面解除されたとはいえ、新型コロナウイルスの脅威がなくなったわけではなく、終息の時期が依然として見えない状況が続いています。この新型コロナウイルス発生と前後するように、北海道、長野、福島、茨城、千葉、東京、奄美大島、沖縄等々、日本の北から南までの各地で地震が頻発し、もしこれに首都直下型地震が発生というダブルパンチをくらったならどうなるかと考えさせられたのは私だけだったでしょうか。

1995年1月17日の阪神・淡路大震災から25年、2011年3月11日の東日本大震災から9年が経過しました。2014年には、政府の地震調査委員会が過去220年間に発生した南関東での8つの大地震を根拠に「30年以内に70%の割合で首都直下型地震の危険」があると示しました。その30年以内ということは、明日かもしれないし30年後かもしれないという、いわばいつ発生してもおかしく無い状況にあることを示唆しています。

●私が阪神淡路大震災と東日本大震災で学んだこと

私事になりますが、阪神・淡路大震災、東日本大震災後ボランティア活動の一環として、避難所運営に関わる経験をさせていただきました。その時感じたのは、自治組織が比較的確立されている避難所、言い換えれば自治会組織がしっかりしている避難所は、運営が比較的スムーズだったことを記憶しています。この経験は、私自身が自治会に抱いていたイメージや意識が変わるきっかけになったともいえます。

●地域コミュニティ・桜台ビレジ自治会の活動は始まったばかり

30年以内に大地震が発生の危険性が示されているとき、「桜台ビレジ」を一つの地域コミュニティとして考えるなら、いざという場合それに耐えられる準備ができているかと言えば、残念ながらできていないというのが現実ではないでしょうか。

桜台ビレジは100%加入ですが、一般的に自治会は管理組合と違い自主的組織であるため、参加が自由です。自治会のイメージといえば「自治会活動は面倒くさそう」「住民同士の人間関係が煩わしい」「プライバシーに触れられたくない」「自分には必要ないし助けも必要ない」などが挙げられるのではないのでしょうか。

ここでは直下型地震が発生したという限定条件で言わせていただければ、いざという時頼りになるのは遠くにいる家族、親類縁者でなく、好むと好まざるとにかかわらず、近くにいる他人である「自治会」や「管理組合」であると思ひます。

桜台ビレジ自治会のごく最近の取り組みでは、防災訓練時における“黄色タオル”による安否確認や住民の交流の場としての“100人で楽しむカレーランチ会”、“桜台ビレジシニアクラブ”の立ち上げ、住民の相互親睦を図るための“クラブ活動”、高齢者を対象にした“誕生日花束プレゼント”など多様な活動が進められています。いずれも、以前の桜台ビレジ自治会には見られなかった活動です。住民の横のつながりを高める活動が、徐々にではありますが広がりつつあると感じています。



マンションラボ「地震が起きたらトイレはどうする？女性の視点で防災知識を学びました」より抜粋。
写真左上：非常用トイレセット。凝固剤、汚物袋、防臭袋が入っています。家庭の水洗トイレや、簡易トイレ使用時の必需品。備蓄は3日分1人15個が目安。

写真右上：ポリ容器トイレ。材料はバケツやゴミ箱などのポリ容器とプチプチシートなどの梱包材、ポリ袋、ガムテープ。ふちが包まれているので、座った時にあたりが柔らかく安定している。マンションラボ ITOITO-STYLE サイトより。
4人（家族）×7回（1日のトイレ利用回数）×14日間＝392回分
約400回分のトイレ利用に必要な資材の準備が必要ということになります。



横浜市では汚物袋の分類はトイレパックで、そのまま「燃やすごみ」で捨てられます。

直下型地震となれば、ライフラインは寸断されているので給水車の配水は、最低でも1週間以上かかることを想定して、我が家は家族3人が16日間対応できるような水の備蓄をしています。



2L×3人×16日分＝96L

1ケース12L×8箱＝96L

（一日必要とする水は、一人2L～3Lとされています）

※「マンションラボ」のWEBサイトには、震災に関連する多くの情報があります。こちらもぜひ参考になさることをお勧めします。

●マンション住人の避難所での生活は想定されていない

首都直下型地震ともなれば、まず鉄道、道路などの公共交通は寸断され、電気・ガス・水道などインフラが復旧するまでには相当の日数を要し、最悪の場合、支援が入る日数にめどがつかないことも予想されます。

また、被災した場合の小中学校の体育館や公民館などでの避難所生活を思い浮かべる方がいらっしゃるかもしれませんが、自治体は、木造が損壊して住めなくなった人たちを想定しています。残念ながら桜台ビレジのような鉄筋コンクリートの集合住宅に住む人たちの避難優先順位は高くありません。

桜台ビレジに住む私たちは、マンションが倒壊、もしくはその危険性がない限り、ライフラインが復旧するまでの間、現在の生活空間を維持しながら生活することになります。被災後も生活の場が避難所＝桜台ビレジにあることを考えれば、住民同士の横のつながりの要として、桜台ビレジ自治会が果たす役割りは大きいものがあると考えます。

●避けて通れない「排泄」問題と防災マニュアル作成

5月中旬、朝日新聞の夕刊に、危機管理研究所の国崎信江さんの＜マンションと防災＞という記事が掲載されていました。その中で特に私の目にとまった記事は、排泄処理の問題でした。

人は食事をすれば避けて通れないのが、排泄物の処理です。污水配管が破損していなければ初期段階では、浴槽にためた水を流すことも可能でしょう。しかし配管が破損している場合は、そうはいきません。「排泄物をトイレで流せない」状況が発生します。配管破損を知らずに誤ってトイレを使用した場合、排泄物が自宅に逆流するだけでなく、他の住居に影響を与える最悪の事態を迎えることになります。配管に異常がないことが確認されるまで流すことは禁じ手となります。

では、流せない汚物を処理するためにどうするか。考えられるのは、ゴミ袋やポリバケツなどに入れてベランダに一時置きをして対応する。しかしこの方法もやがて時間とともに避けて通れない「匂い」の問題が発生します。被災生活が長期間化すれば、ベランダも排泄物や生活ごみでいっぱいになり、その「匂い」も室内に逆流してきます。ではこれらの厳しい環境を少しでも緩和させるには、どうしたらいいのでしょうか。

危機管理研究所の国崎さんは、次のように提案されています。「ライフラインが復旧するまで、断水も、ごみ収集もその復旧には相当時間がかかる。特に排泄物処理では、ポリ袋に入れ防臭剤をかけて断水して使えなくなった浴槽に保管、できれば医療用に開発された防臭袋を手に入れ対応するのも一つの方法になる」とのこと。（そのほか凝固剤を使用する方法、簡易トイレの使用など色々あるようです。）

たとえ、電気・水道等のライフラインが復旧したとしても、建物のゆがみや圧縮、配管異常が見つければ当然のことながら、排泄物を流すことは不可能で「自宅で保管」という状態が続くことを覚悟しておかなければならないでしょう。排泄物処理をめぐるでも、現在のところ何も処理マニュアルがありません。世の中には数々の防災マニュアルがありますが、桜台ビレジに対応した防災マニュアルの作成が、待たれるところです。

●「誰もが災害対策本部員であり、だれもが戦力」をめざして

今年の2月の「桜台ビレジ自治会だより」で青葉区内でも最も防災への取り組みが進んでいるマンションとして、「ピアス市ヶ尾」について紹介されていました。

今回書かせていただいた内容については、ご批判なりご意見があろうかと思ひます。建設的なご意見を頂ければありがたいです。桜台ビレジ自治会も先進的な「ピアス市ヶ尾」の活動に学びつつ、自治会に関心がある人もそうでない方も、こと防災に関しては「誰もが災害対策本部員であり、だれでも戦力」であるそんな桜台ビレジ自治会を一緒に作り上げていければと思ひます。

※災害時に「トイレ」使用例については、あくまで一例であることをご了承ください。